

## 乳幼児をもつ母親の育児肯定感・制約感に関する研究

— 時間的展望, Self-esteemからの検討 —

鈴木抄子

### I. 問題・目的

戦後50年の間に、平均寿命の伸び、出産に対する意識変革による少子化、家事時間の短縮化などによって、女性のライフスタイル、ライフコースが変化し、生き方に対する意識も変わってきつつある。それに伴い女性たちが「主たる養育者としての母親」「家事の担い手」としての一生の中で過ごす時間が減少した。現在、女性たちが人生を見通して、もはや一生の仕事ではなくなった役割に縛られることに対して、何らかの疑問や葛藤を感じるようになったのも理解の及ぶところとなり、従来女性特有のものだと考えられていた「母性」という概念についても疑問が投げかけられることとなった。このような時代背景から、大日向(1988)は、母親が子どもに最良の養育態度を与えてしかるべきだとして母親行動を分析対象とした研究を批判し、母親意識に影響する要因を検証している。また、現在まで認められてこなかった、母親の子どもや育児に対する感情のnegativeな側面へも光を当てていこうとする試みもなされ始めている(Swigart, 1992)

これまでの研究で、育児にまつわる否定的、消極的な意識は、育児そのものや子どもたちに対する拒否感ではなく、母親たちが生活全体や人生を見通す中で、育児と他の指向性・生活活動が相克することで起きる葛藤であると報告されている(牧野, 1981; 1982; 1985; 1988; 柏木, 1980; 1994; 青木ら, 1986; 大日向, 1988; 野澤, 1989)。また、木村ら(1985)は、子どもに関心の低い母親は、育児不安兆候を呈しにくく、不安が低ければ低いほど「健康」で「望ましい」母親であるとは言えないと述べている。以上のことから、本研究では、育児感情における肯定的な側面と否定的な側面を同一線上の相対する感情として捉えるのではなく、育児肯定感と育児制約感を独立のものとして考え、よって各々の規定因も異なるのではないかと仮説をたて、検証することを一つの目的とした。また徳田ら(1995)は、母親たちが、子育てと自らの自己実現との間に葛藤を感じつつも、未来を見つめたり、現在に何らかの意味を見いだせること自体が現在を肯定し、母親の支えとなっている可能性を示唆している。このことから、育児感情によって母親たちの人生の見通しが異なるのではないかと、時間に対する

意味付けをいかに行うかによって母親たちの育児感情が異なるのではないかと考えた。さらに、育児をめぐる葛藤は抱えてしかるべきものとして捉えるのならば、母親がその葛藤を抱えつつ、自身の精神的健康をいかに維持するのが、心理的援助の方向性を模索するために必要であると思われる。よって育児をめぐる葛藤を持っていたとしても、時間的な見通しを持つことによって、母親たちの精神的健康の一側面である self-esteem は保てるのではないかと仮定し、これらの検証も目的の一つをした。加えて、母親たちの様々な価値観と趣向性が反映されると考えられる具体的なライフコースパターンの志向性を尋ね、育児感情や時間的な見通し(時間的展望体験)に関して検討を行うことにした。

### II. 方法

大多数の児が、就園以前のため、母子で過ごす時間が多と思われる3歳以下の子どもをもつ母親を対象とした。調査は、1994年11月から12月にかけて、県内6市町下で行われた1歳6ヶ月、3歳児健診に集まった母親に、質問紙を配布し、郵送により回収した。また、別の4市町下在住の3歳以下の子どもを持つ母親に対しても、郵送で調査を依頼し、郵送により回収した。上記方法による質問紙調査への協力者は、329名で、質問紙の回収率は、およそ38%であった。

最終的な分析の対象となったのは、307名である。母親の年齢は、平均30.35歳(SD = 3.77, range: 20~41歳)であった。第一子を出産した年齢は、平均26.52歳(range: 16~40歳)、子どもの年齢は、17歳から0歳までであった。

質問紙は、小野ら(1994)の31項目からなる母性意識尺度、白井(1994)の18項目からなる時間的展望体験尺度; Experiential Time Perspective Scale (ETPS)と12項目からなる時間的信念尺度(1993)、Rosenberg(1965)によるSelf-Esteem Scale (SES)を用いた。また、8タイプの代表的な女性のライフコースパターンを示し、母親たちが理想と考えるライフコース、実際になりそうだと思うライフコースに関してそれぞれ回答を求めた(経済企画庁国民生活局, 1987)。

名古屋大学大型計算機で、統計パッケージ SAS を用いデータ処理、解析を行った。

### Ⅲ. 結果と考察

母性意識尺度は、「育児疲労・制約感」「育児肯定感」「子ども至上感」「夫婦協力感」「伝統的な性役割観」「育児以外の価値指向」、ETPSは「目標指向性」「現在の充実感」「希望」「過去の受容」、時間的信念尺度は「刹那主義」「展望主義」という下位尺度から構成されていた。

育児肯定感、育児制約感についての検討を行ったところ、低いながらもいくつかの有意な相関関係がみられた。育児疲労・制約感と夫婦協力感、育児以外の価値指向との間で正の相関がみられ、育児肯定感と夫婦協力感、子ども至上感との間で正の相関がみられた。また、育児疲労・制約感と育児肯定感の間に、負の相関がみられた。これより、育児肯定感には子ども至上感、育児疲労・制約感には育児以外の価値指向という別々の規定因が予測された。ただし、それぞれが独立した要因とかわりつつも、肯定感と疲労・制約感の相互の関係が大きいように思われた。しかしながら、大卒以上の母親が他群との比較において、育児肯定感、疲労・制約感の両方の得点が最も高くアンビパレントであったことを考えると、両感情がまったく相極に位置するとも言いがたかった。次に母親の属性別に比較をした。年齢、第一子出産年齢、現在の就業の有無、家族形態、子どもの数による育児感情の差はみられなかった。子どもの年齢に関して、当初時間的な拘束感が、母親自身の育児疲労・制約感を高めるのではないかと考え、就園以前の3歳以下の子どもをもつ母親とそうではない母親との間の比較を行ったが差は見られなかった。続いて青木に倣い、第一子の第一次反抗期に注目したところ第一子に3～6歳をもち、子どもの自己主張を初めての経験としている母親の育児疲労・制約感が高かった。育児感情には、時間的拘束感や身体的世話の負担ではなく、子どものやりとりの影響が大きいようだ。本研究の主たる目的ではなかったが子どもの発達段階と母親自身の発達との関連が垣間みられる結果となった。

次に平均点を基準として、育児疲労・制約感と肯定感の得点別に群分けをし、その4群間で他の尺度の得点に差がみられるかの分散分析を行った。夫婦協力感は、育児肯定感を弱く、育児制約感を強くさせるようであった。子ども至上感は制約感が高くても肯定感をもたせる

ものとして効いていた。また、育児疲労・制約感がただ高いということではなく、育児に対する否定感情が肯定感情よりも強まること、時間的展望体験を広がりのないものにさせたり、self-esteemを低めることが分かった。否定的な感情と肯定的な感情のバランスをいかにとるかということが大切であると思われた。

ライフコースパターンに関して、育児以外の指向性の一つである仕事をもち続けたいという理想と現実の一致、不一致群間の平均値に注目したところ、一致群は、目標指向性とself-esteemがすべての群との比較において高かった。

母親たちが葛藤をもちつつも現在を肯定的に捉えていくための手がかかり、時間的信念をとりあげたが、今回の調査において、刹那主義的態度、展望主義的態度は直接育児感情に影響を及ぼさなかった。まずは、尺度構成の面からの検討を今後行っていきたい。

育児感情、時間的展望体験とself-esteemとの間には、それぞれ有意な相関がみられた。時間的展望体験とself-esteemの関係がより強かったものの、いかなる育児感情をもとうとも時間的展望体験が安定することでself-esteemは保てるというプロセスを説明することは困難であった。したがって、今後母親がどのような過程を経て育児葛藤を抱えつつも精神的健康を保つというプロセスを明らかにするためには、継時的な視点が重要であり、実際に母親たちがどのような体験をしているのかについて聴き取り調査を行うことが必要であると思われる。

本研究によって、育児感情の規定因に関しては、おおむね先行研究の知見を得るにとどまった。子どもこそが生き甲斐だ、子どもさえいれば幸せだという回答は全体の半数を満たさず、8割以上の母親たちが育児以外の価値指向性をもっているという結果から、今回得られた育児肯定感、制約感の規定因は、母親全体の指向性に偏りがある中で得られた結果だということを念頭に置かねばならない。いずれにしても、子育てによって充実感を得るだけでは現在の母親は満たされない現実を示唆されているので、主に継時的な心理プロセスに焦点を当てて、育児と自己実現をめぐる葛藤を抱える母親たちへのアプローチの探求をすすめることを課題としたい。